

NPO 法人 がんばッと !! 玉浦



宮城県

宮城県岩沼市で、東日本大震災直後の避難所生活の中、地元の青年によって設立された団体で、当初は物資輸送やボランティアのマッチング等緊急対応を実施。その後、地元玉浦地区の再建に向けて、同市全体の復興を考えるシンポジウムを開催し具体的なビジョンを提示することで、若者の地元からの流出に歯止めをし、復興に向けたやる気と関心を引き付ける原動力となった。現在は、同市の主要な産業だった農業の復興に取り組んでおり、被災前の農業の形態に戻すのではなく、再建の目処が立たない個人の農家をまとめ、ばらばらだった農地を大規模な農地として活用する事業に展開し、東京のIT企業を活用して販売ルートの拡大や商品開発などを加えピンチをチャンスにと新たな農業モデルを構築している。

(推薦者：西村 明宏)

理事長

武田 英之

社会貢献の功績受賞に於いて

まず、初めに今回の表彰にあたり、誠にありがたく感謝申し上げます。

社会貢献支援財団の皆様には、大変お世話になりましたこと心より御礼申し上げます。

私共の活動が少なからず認めていただいたことにメンバー一同大変な驚きと感動を覚え今後益々精進し、活動していく励みができましたこと、ひとえに皆様の御蔭と心より感謝申し上げます。

2011年3月11日、忘れてたくても忘れられない日であります。

消防団活動で海岸を目指していた私ども3名は、最初何が起こったか分からず無我夢中で濁流から逃げ必死に工場の屋根に登った事、今でも鮮明に脳裏に焼き付いております。次の日、日の出とともに3人で腰まで水に浸かりながら歩いて自宅まで1時間かけてたどり着いた時の光景があまりにも凄まじく言葉も出なかった事、又、私事ではありますが、自宅には寝たきりのおふくろがおり、家族共々無事かどうか分からず瓦礫の山を必死で超えて自宅にたどり着き無事を確認した事、表彰式において、映像を見ていた時に様々な光景が走馬灯のように頭の中を駆け巡りました。

避難所生活が始まりました。そこで、昔からの付き合いのある先輩や後輩と毎日を共にし、これからどうするか、どうしたらいいのか、笑ったり、泣いたりして寒空の中話をしておりました。そこで皆で一致したことが「被災者根性は1週間で終わり」ということでした。それから、若いメンバーを集め自分たちの住む町は自分たちで綺麗にしようとして最初に我が地区の集会所の清掃を始め、5月の連休には行政を待たずに側溝を町内会全員で清掃することができました。徐々に綺麗になっていく私たちの町の光景に感動をし、皆でおにぎりを頬張ったことが、今では大変懐かしく思います。

又、日本全国から支援物資が続々届いておりました。行政に届くと倉庫替わりの体育館に押し込められそのままになっている様子を目の当たりにし、なぜ、どういうわけかと疑問を感じ行政に意見を言いに行きました。「全員分の数がないので平等に配れないので」と言う行政の意見を聞き、ならば日本全国の善意を無にすることになるのではないかと、ならば私たちが窓口となり支援を無駄にすることなく私たちが活動をしようと立ち上げたのが、「がんばッと玉浦」であります。

岩沼市だけにとどまらず、岩沼市の倉庫に眠っていた水を南三陸町の困っている地

区に運んだり、子供たちを元気にしようとステッカーを作成して無料で配ったり、山口県から届いたコロッケを毎日各市町村の避難所に行き配ったり、数限りなくらいに活動の枠を広げて行きました。

無我夢中で活動をしている時に出会ったのが、当時、東京大学の石川教授、建築家の伊東先生であり、又はNPO法人ロシナンテスの川原さんであります。そんないろいろな方々に指導や援助をうけNPO法人を立ち上げることができました。NPO法人とは何かよく分からずに立上げ、無知ほど怖いものはないことだと今更ながらにして思っている次第であります。

被災者全員にそれぞれの物語があり、又考えがあります。未だに被災者根性でいる方も多数おられます。今後はそんな方々の支えになりいち早くその思いを取り除き新しい岩沼、新しい玉浦地区を創る事に心をひとつにして邁進できればと考えております。農業の問題、まちづくりの課題、その他数々のことがあります。その一助をになって少しでも貢献できればと思っております。今回の表彰を励みに今後も活動をしていく事をメンバー一同、心をひとつにして誓いあい、本当の意味の「がんばッと玉浦」を築きたいと思えます。

夫婦で東京ましてや帝国ホテルに泊まれたこと、結婚生活30年を超えましたが初めてのことに感動し感謝しております。ひとのことに活動をし、我生活を女房に任せっきりでございました。今回の件で少しは恩返しできたのかなと思います。それも、ひとえに社会貢献支援財団の皆様、特に池田様のおかげと感謝を申し上げ、末筆とさせていただきます。今後共皆様の活躍をご祈念申し上げます。誠にありがとうございました。

理事長 武田 英之



▲畑作業



▲今年もたわわに実った稲



▲武田さん田んぼの前で



▲地元の仲間と



▲稲刈りの様子

特定非営利活動法人 市村自然塾 九州



佐賀県

佐賀県出身の名経営者・市村清氏の生誕100周年を記念して設立されたNPO法人で、平成15年に佐賀県鳥栖市で同県と福岡県を中心に小学4年生から中学2年生の男女60名を対象に、農作物の栽培から収穫までの体験や、自然体験を含めた活動を延べ54日間の共同生活を通じ「人として守るべきルールを身に付け、主体性・創造性等の資質を育む」場として運営し、青少年の健全育成に寄与する活動を実施している。これまでに687人を越える卒業生を輩出した。

(推薦者：佐賀県くらし環境本部男女参画・県民協働課)

塾頭
合谷 正一郎

この度は、このような大変名誉ある賞をいただき、大変喜んでおります。

これもひとえに推薦していただきました佐賀県様や支援していただいている多くの会員企業様や会員の方々のおかげと感謝しております。

当日は表彰式典、祝賀会等の席でさまざまな社会貢献活動を行っている方々とお話する機会を持つことができました。みなさんの苦労や喜びを聞くことができ、全国にはこのように頑張っている人々が大勢いらっしゃることに感銘いたしました。

「市村自然塾 九州」は子どもたちの健全育成、成長を目的に“生きる力を大地から学ぶ”を基本理念に農業活動を中心に自然体験活動、共同生活を柱に活動しています。

塾設立当時（2003年）、子どもの実態は「夜遅くまでゲームをし、学校に行っても目が覚めていない」「持続性がない」「我慢できない」「友達とうまく関れない」「指示待ちが多い」など気になる事例が多くありました。自然塾創始者である浜田 広氏（当時 株式会社リコー会長）は、“昔はみんな貧乏で物が不足し、多少不便で不自由だった。何をやるにも努力や工夫で補うほかない。結果として自然の生態を知り、人から知恵やルールを学んだ。素晴らしい教育環境だった。ところが世の中が裕福になり、教育には自ら努力する環境が必要なのに、逆に満たされている。だから自然を知り、工夫をしなければならない体験の場を提供したい”と提唱され、自然塾が設立されました。

現在、市村自然塾 九州での活動は12年を過ぎ、卒塾した塾生も687名になりました。

今年も小学4年から中学2年までの子どもたち男女各30名が、9ヶ月18ステージで作物作りから収穫までを体験し、2泊3日の共同生活で仲間との付き合い方、協力の仕方を学び、卒塾していきました。

また、今回の社会貢献賞受賞は私も職員一同と共に、大変励みになりました。

今後も自然にどっぷりと子どもたちを浸し、農業体験の素晴らしさと必要性を体験させ命の大切さや感謝の心などが分かる、優しさや思いやりのある子どもを育てていきたいと考えております。

最後になりましたが、「社会貢献支援財団」の役員様、職員の皆様には心細かいご配慮をいただきまして、心よりお礼を申し上げます。

塾頭 合谷 正一郎



▲ 鍬打ちの練習



▲ ナスの手入れ



▲ 野菜の収穫



▲ 早朝日の出拝観



▲ 野菜料理会



▲ 泥んこ運動会

特定非営利活動法人 上野丘さつき家族会 「淡河町ゾーン・バス」



理事長
相良 幸信

兵庫県

兵庫県神戸市で障がい者施設家族の会が運営する NPO 法人で、「淡河町ゾーン・バス」(有料)の運行を平成21年から行っている。この法人の理事長が、町内アンケートで「交通のアクセスの充実」を望む声が多いのを見てコミュニティバスの運営を考えた。運行は診療所やスーパーなどを結ぶ定期便の他、利用者の自宅まで駆け付け、目的地まで運ぶと言った民間バスには到底出来ないサービスが人気を呼び、利用者は月平均500~600人に達している。過疎地に暮らす住民の貴重な足として重宝がられ、助成金・補助金に頼らない黒字経営で運行を続けている。

(推薦者：社会福祉法人 神戸市北区社会福祉協議会)

この度は、“社会貢献者表彰”を頂き有難うございました。併せて推薦いただいた関係諸団体様へ厚くお礼申し上げます。ご乗車いただいた方々やご理解いただいた多くの町民の皆様に感謝・感謝です。

神戸のチベット地区と称される「淡河町」において、田舎のバスの運行が私たちの使命と思い立ってから早や10年になろうとしています。運行開始後約6年で36,000人の乗車数を数え、事故なく助成金・補助金なしに自立して「安全で安心出来る継続可能な運行を！」ミッションとしてハンドルを握ってまいりました。

私達には“社会貢献”をしているとの思いは全く無く、高齢者が高齢者を支援する時代であり「少しは福祉施設の為になり、チョットは高齢者に喜ばれ運行者には薄謝の小遣いが…」程度の気持ちです。

神戸市と言っても町内人口は半減し、高齢者比率は40%になろうとしている現状の中、既存公共交通は減便の一途にあります。その既存交通網を補完し皆が気軽に掛かけられる交通アクセスの一端を担ってまいりました。

然しながら「今のままでは、持ちこたえられなくなる」との危機感もあり今後は町内の将来像(グランドデザイン)を模索し、町民みんなが参画できるような「新しい交通支援システム」を構築すべく取り組んでまいります。

表彰式に参加させていただき全国各所の受賞者様のお取り組みを見聞きするにつけ「我々もまだまだやらなければならない事が多くある」と感じております。少子高齢化・過疎化だからと言い訳するものではなく、足元を見つめ直して地域の資源を有効に利用すべく老いも若きも一丸となって取り組んでおられる姿に敬服いたしました。

私達も少しは本当の意味で“地域社会に貢献”出来るよう、今一度原点に立ち返っ

て考えてみたいと……。

最後に社会貢献支援財団様が小さな田舎町の小さな私たちの活動にまで目を向けて頂きましたこと有難く厚くお礼申し上げます。有難うございました。

理事長 相良 幸信



▲僕が「淡河町ゾーン・バス」です！



▲運転下手の代表者理事です。でも事故なしは立派！



▲ハイシャ（歯科者）ですが「ゾーン・バス（配車）担当」です。



▲おばーちゃん、気をつけてね



▲ミニデイサービス全員集合！ さあ～これから昼食よ！



▲今から昔の別嬪さんのお迎えに！

久保田 英朗／河野 伸二郎



久保田 英朗



河野 伸二郎

神奈川県

昭和62年からフィリピンでの歯科医療ボランティア活動を行っている。同国のセブ市やネグロス島で公衆衛生活動を根付かせる活動を行なった。その過程で、口唇裂口蓋裂患者が多くみられ、3年の準備期間を経て、ネグロス島で平成13年にフィリピン口唇裂口蓋裂手術事業を開始した。10年間で200人以上の手術を行っている。2014年は、横須賀RCの支援により、現地医療従事者への技術移転のため、職業訓練を現地と横須賀で行なった。

(推薦者：香月 武)

久保田 英朗

私たちは、フィリピン国での口唇裂・口蓋裂児に対するボランティア手術活動を行っています。アジア人の口唇口蓋裂の発生率は0.2%程で、日本では育成医療や厚生医療などの医療保険制度が整備されており、出生時から成人に至るまで一貫した治療を無償で受けることが出来ます。一方、アジアの国々では、十分な医療保険制度が確立されておらず、かつ貧富の差が激しいため、口唇裂による審美的障害や口蓋裂による発音障害を持ったまま大人にならざるを得ないという状況の国々があります。われわれのフィリピンでのプロジェクトは、年1回の活動としてスタートし1999年から現在まで10回以上の活動を行い、手術を行った患者は通算200余名になります。

活動はフィリピン国ネグロス島のHoly Child病院で、現地ロータリークラブと歯科医師会の依頼に基づいて行っています。この10年間の活動でも患者数は一向に減少せず、毎年多くの患者が我々の医療活動を待ち受けています。その理由として、①口唇口蓋裂の患者を手術する十分な技術をもった現地の医師が少ないこと、②貧困のため患者の家族が年収をはるかに上回る治療費を支払うことができないこと等が考えられます。そこで、私たちは現地の医療関係者にこれらの患者を治療する医療技術の移転を図ること、ならびに口蓋裂手術後の患児に対し、言語治療を行う現地の言語療法士(Speech Therapist)を養成することで、当該地域における口唇裂・口蓋裂患者の医療技術を向上させ、ひいては修学前で未治療のまま過ごしている患児の数を減少させたいと考えています。

2014年には、ようやく現地の歯科医師、言語聴覚士、看護師等を日本に招聘し、口唇口蓋裂の医療技術を研修することができました。活動10年を経てようやく医療技術移転の糸口が見えてきた思いがします。今回、貴財団の社会貢献賞の受賞が決まり、私どものみならず、現地の医療スタッフの励みともなりました。今後とも、本活動を通じて日本とフィリピンの友好関係を築いていきたいと思っております。最後に貴財団関係者の方々に感謝申し上げます。

河野 伸二郎

小学校5年、6年生時、父の仕事の関係で、インドのカルカッタ(現コルカタ)で過ごしました。昭和40年～41年のことです。貧富の差を目の当たりにした私は以来、社会人になりましたら、発展途上国のお役に立てることができればと考えておりました。

神奈川歯科大学を卒業して2年目に大学の先輩らが、フィリピン、セブ市で歯科ボランティア活動をなさっていると聞き、さっそくお仲間に入れていただきました。昭

和62年当時は、治療内容は抜歯が主です。地域の発展とともに食の欧米化は戦後の日本と同様、虫歯の多発を招きます。私共の無料歯科診療だけでは、到底追いつきません。そこで、小学校を中心に歯科衛生士を派遣し、歯ブラシ指導やフッ素洗口等の公衆衛生活動を現地の行政とともに行ってきました。小学校の検診、指導の過程で、約1%（日本では0.5%）の児童に口唇口蓋裂がみられ、その多さに驚きました。当然何の処置もされておられません。言語障害と外見による差別に苦しんでいます。成人の患者らは就業や家族を得ることに多大な障害となります。帰国し、すでに他国においてこの種の手術ボランティアをされておりました久保田英朗教授にご相談申し上げ、平成10年よりこの事業の立ち上げを始めました。3年の準備期間を経てネグロス島ドゥマゲッティ市において実現し、以来、年間20名程度の方々の手術を行っております。

さまざまな、困難はございましたが、短期特別医療免許の取得が最も高いハードルだったように思います。すでに10年以上、当地域において一般歯科治療のボランティアを行っており、政府関係者と良好な関係を築いていたこと、また、素晴らしい現地カウンターパートを得ていたことが、解決の最大理由でしょう。術後の親御さんらの安堵の笑顔と感謝の言葉をお聞きすると、また来年も実行しようと思います。彼らの人生は確実に変わっていくことと推察されます。

社会貢献支援財団におかれましては、私共の活動を取り上げていただき、また過分な表彰までいただき誠にありがたく存じ上げます。式典祝宴における他団体との交流・情報交換はそれぞれの事業の向上に大いに役立つことと思います。あわせて感謝申し上げます。ありがとうございました。



▲今年8月3日から10日まで、日本の医療スタッフが現地へ赴き、医療技術の移転を行った。活動の主体となる Holy Child 病院の理事長と久保田（向かって右）河野（向かって左）の両氏。



▲現地の歯科医師達に口唇裂手術の指導を行っている久保田氏。



▲術後の患者回診風景。心配そうな表情で覗き込む患者の家族たち。



▲全ての手術が終了し、手術室のスタッフ全員と我々のスナップ。

特定非営利活動法人 NPO スチューデント・サポート・フェイス



佐賀県

佐賀県武雄市で平成15年に設立されたNPO法人で、不登校、引きこもり、非行等、学校や社会への不応適状態にある子ども・若者を対象に訪問支援を行っている。これまでに県市等からの委託事業も含め135,000件以上の相談に応じ、県内を中心に11,000件以上のアウトリーチ（訪問支援）に携わり、そのうち9割以上が引きこもりから脱出するといった成果をあげている。同団体では①アウトリーチ（訪問支援事業）②コネクションズ事業③教育支援事業④キャリア形成支援事業⑤メンタルヘルス事業⑥支援ネットワーク事業⑦シンクタンク事業等を数多くの事業を展開している。また、佐賀発のモデルケースともなっており代表は全国で講演を行う他、厚労省等の政府系委員会での成果を発信する等成果が評価されている。

（推薦者：公益財団法人 社会貢献支援財団）

代表理事

谷口 仁史

当法人は、平成15年に設立されたNPO法人で、不登校、ひきこもり、非行、ニート等困難を抱える子ども・若者の自立支援に取り組んでいます。活動の中心となっているのは、改善率9割の家庭教師方式のアウトリーチ（訪問支援）活動で、その他専門家が常駐し適応訓練を行うフリースペースの運営、心理療法等を組み込んだ体験活動、認知行動療法と職親制度を活用した就労支援事業、支援ネットワークの整備等、社会参加・職業的自立に至るまでの総合的な支援事業を展開しています。

行政機関との協働も年々発展を遂げ、不登校児童生徒を対象としたIT活用支援事業（佐賀市）に始まり、34名の常勤職員の小中学校への配置（佐賀市、嬉野市）、全公立高校を対象とした相談員の派遣及び重篤ケースへのアウトリーチ（佐賀県）、児童相談所への職員の配置（佐賀県）等、先進的な協働事業に携わった他、若年無業者の職業的自立を支援する「地域若者サポートステーション事業（厚労省認定）」、生活困窮者自立支援法に係る総合相談窓口「佐賀市生活自立支援センター」の受託運営、「子ども・若者育成支援推進法」に関しては、「県子ども・若者総合相談センター（法13条）」及び県内唯一の「指定支援機関（法22条）」として信任を受けるなど当該分野における中核機関に位置づけられています。

これら委託事業を含む相談実績は、過去11年で13万5千件に及び、ここ数年は年2万件を超えるなど、県内で最も多くの相談ニーズに対応するNPO法人となった他、改善率及び就職等進路決定者数共に全国トップレベルの実績を収め続けた結果、県全体の若年無業者数も大幅に減少に向かうなど社会問題の解決に向けた糸口も見えてきました。

我々がこれらの活動を通じて目指すものは、社会的孤立・排除を生まない支援体制の確立です。各種実態調査で明らかかなように背景要因の深刻化、複雑化の傾向を鑑み

るとその実現のためには、突破しなければならない「障壁」は数多く、その道のりも決して平坦なものではありません。そういった意味でも今回の受賞は、活動を共にする、すべての人々に勇気を与えるもので、大変意義深く、今後の取り組みを後押しする大きな「力」となりました。授賞式においても安倍昭恵会長を始め、財団の皆様から温かいお言葉を頂戴した他、受賞者の皆様からも多くの感動を与えて頂きました。スタッフ一同、皆様から賜ったご厚情を胸に、より一層研鑽を積み、粉骨碎身、今後も活動に専心する所存です。

代表理事 谷口 仁史



▲講演会



▲就労体験



▲職場見学



▲陶芸



▲訪問支援風景

鬼 一二三



国際日本文化学園
理事長

カンボジア王国

平成7年から世界遺産アンコールワットの玄関口であるカンボジアのシェムリアップ州で日本語教室と図書館の運営をしている。日本語教室は月曜から金曜の朝6時から夜10時まで一時間単位で行われており、初級から商談のための日本語まで22種類と幅広くカリキュラムが組まれている。20日で10ドルの授業料だが、経営は実質赤字。「入学」「卒業」は自由で門戸は大きく開かれており、通学していた生徒の多くはガイドなどの観光業に従事している。ただ言語を教授するのみならず、個別の指導で潜在能力を引き出し、明日のカンボジアを背負って立つ人材の育成も行っている。現在、様々な年齢層、家庭環境を背景に持つ延べ194人の生徒がおり、これまでに2,500人以上が学んでいる。

(推薦者：高山 良二)

この度は思いもよらぬ大変立派な賞を頂き、光栄に存じます。19年に亘りカンボジアで続けて参りました地道な活動が多くの皆様の前で賞賛を受ける機会を頂戴し、誠に嬉しい限りで御座います。

長きに亘りご支援下さっている方々に対し、今までは会報をお送りして現状報告をするのみで御座いましたが、この度は式典にお招きする事が出来、支援者の皆様到大変喜んで頂けました。日本に留学中の教え子達も含め、40名もの方々にお越し頂き祝して頂きました。

夢にも思わなかった首相令夫人直々のご授賞、帝国ホテルと言う最高の場へのご招待、これ程素晴らしい式典がありますでしょうか。この様な場に支援者の皆様をお招きする事によって感謝の気持ちをお伝え出来る機会は他には無い事で御座いましょう。

2,500名に上る人々が国際日本文化学園一二三日本語教室で日本語を学んでゆき、そのお蔭で町のあちらこちらで教え子が日本語を使用して堂々と仕事をしている姿を目に致します。誠に遣り甲斐の在る奉仕をさせて頂いていると感じ、感謝の毎日です。日本語教育の普及や図書館の運営をただただ個人レベルで行って参りましたが、此の度、公の場で表彰されましたからには、中途半端に終わらせる事など決して無い様、更に誠心誠意この事業を続けて参ります事をお約束申し上げます。

心苦しい事がただ一つ、副賞を自身の為に使う様にとのお言葉でしたが、そのご指示には沿えそうに御座いません。元来贅沢の出来ない性分なのかも知れません。頂いた副賞は事業遂行の助けと致します事をお赦し下さい。それが結局は後に素晴らしい成果として現れ、金銭では買えない私の大きな喜びとなると信じております。

最後に、式典にカンボジアの未来を背負うであろう教え子達をお招き頂いた事に心

より感謝致します。生活費を自ら稼ぎ出しながら熱心に学ぶ留学生達で御座います。皆、人命救助やボランティア活動家を尊敬し、他人の幸せを自分の幸せとする貢献者を称賛しておりました。私は近年、一時帰国の折に格安の航空券ばかり利用しており、物の運搬が困難でしたが、此の度は一般旅行客同様の航空会社の利用及び教え子の同伴により、この機会に式典に参集致しました留学生達全員に山の様なカンボジアの食材のお土産を手渡す事が出来ました。これも偏に財団の皆様の温かいご配慮によるものと心より感謝致します。教え子達は私の受賞を自身の誇りと申しており、改めまして此の度の受賞の波及効果を実感しております。



▲日本語ガイドコースの実習 東メボン遺跡



▲図書館 蔵書数は5,000冊



▲初級クラス 書初めをバックに旧校舎で



▲日本語能力試験合格おめでとう！ 認定書を手に記念撮影



▲平成13年 秋篠宮殿下とともに

社会福祉法人 柚の木福祉会



福岡県

福岡県糟屋郡で昭和55年に無認可の福祉作業所として設立され、翌年に社会福祉法人の認可を受け、同57年に同県で民間初の通所授産施設「柚の木学園」となった。現在、障がい者、子ども、高齢者の3つのカテゴリーで15の事業を行っている。特筆すべきは、公立の小学校舎内に有る「福祉創造塾ふれいあいの部屋」の存在で、7名程の知的障がい者が通い、軽作業の傍ら、すぐ隣の教室で学ぶ小学生が休み時間になるとこの部屋を訪れ、障がい者から紙すきなどを教わる。小学生のうちからハンディを持った人に分け隔てなく接する精神を育むことや、子どもを通じて親の障がい者に対する理解も深まり、全国で初めて、障がい者施設が垣根無く児童と触れ合える場所となっている。

(推薦者：公益財団法人 社会貢献支援財団)

理事長

白谷 憲生

この度は社会福祉法人柚の木福祉会に、大変荣誉ある賞を賜り誠に光栄に存じます。当福祉会の長年にわたる福祉への取り組みにこのような評価をいただいたことは、思いを新たに進んでいくための力となりました。

柚の木福祉会は、主に知的障がいのある方への支援を目的として設立されました。しかし、既存の制度だけでは障がいのある方、そしてそのご家族のニーズに応えることが難しいと考え、独自のサービスを次々と開発してまいりました。日本で初めて小学校の余裕教室を利用した作業所や、当時としては画期的なレストラン形式の施設、町内会がバックアップしてくださるグループホームなど、広く深く地域と関わり合いながらご利用様が活動できる場を作りました。行政とともに法律化される前から立ち上げた乳幼児発達支援事業には、地域で支援を受けるために幼稚園、保育園、小学校とのネットワークができました。高齢者向けサービスも加え、こどもから、障がい、高齢までのライフステージをトータルにサポートできる福祉に発展してまいりました。

ここに至るまでの道のりは、福祉を志す者は皆そうであるように、決して平坦なものではありません。しかし困難に出会った時には、必ずそれを助ける手が差し伸べられてまいりました。利用者様から、そのご家族から、地域の方々や異業種の方々から、ボランティアの皆様、理解ある議会や行政の皆様から差し出されるあたたかく、優しいその手に、いつも感動し、感謝し、涙したものです。

今回の受賞は、支えていただいたすべての方とともに受賞させていただいたと考えています。

地域全体でサポートを必要とする人を受け入れ、障がいのあるなしに関わらず、こどもから高齢までその地域に住むあらゆる人が共に幸せに暮らせる“あったかいまちづくり”。それこそが、わたしたち柚の木福祉会が目指しているソーシャルインクルー

ジョンです。私たちが事業を営んでいるところは、その“あったかいまち”に近づきつつあると感じています。さらに広げていくために、共感される多くの方々の手をお借りしながら、これからも一層努力してまいります。

最後に、福祉を担う職員はその過酷な状況ばかりがクローズアップされ、一人ひとりにはなかなかスポットライトが当たりません。しかし彼らは困難にありながら、ただひたむきに自分のなすべき仕事に心血を注いでいます。この場をお借りして、福祉を担うすべての人に対して最大級の感謝と賞賛を送り、共に未来に進んでいきたいと思えます。

御財団の高邁な理念に敬服し、これらからの活動がますますご発展され、受賞を喜ぶ多くの方々の笑顔で包まれることを祈念いたします。

理事長 白谷 憲生



▲寄り添う支援



▲幼稚園の作業体験



▲小学校内作業所・総合学習



▲公開菓子工房



▲地域交流・グループホーム

特定非営利活動法人 日本歯科ボランティア機構



広島県

平成12年に設立され、その後ベトナム政府公認の身体障がい者や孤児などの支援団体と提携して同国で活動するためのライセンスを取得し、年に6～7回同国を訪れて歯科検診や治療、予防活動などを無償で行っている。同会の代表藤岡医師は毎年関係者を伴って2班に分かれ、ホーチミンを中心に治療を行っている。治療や検診には一日半は費やさず、1回で600人以上を診る。歯磨きの習慣すら定着していないが、紙芝居を使って歯磨きの重要性を説明したり、ブラッシングの指導も行なう。藤岡さんは平成18年に巡回歯科医診療車をホーチミン大学歯学部へ寄贈し、同大学の教官や学生などが行っている貧困地域の無料歯科診察に利用されている。団体は全国の歯科医師の有志で構成されている。

(推薦者：公益財団法人 社会貢献支援財団)

理事

山本 春江

今から14年前に、日本歯科ボランティア機構が理事長 藤岡道治により発足され今日まで皆様と比べて良いことを行っている自覚もなく、ただベトナムの貧しい子供達が少しでも、希望が持てる様にと、歯科治療をしてまいりました。

最初はストリートチルドレンが対象でした。その頃はホーチミンの町でもその子供達が溢れ、外国人観光客に群がっていました。

片言の日本語で（社長 千円 千円）と扇子やガムを売りつけてきます。

余談ですが、なぜ日本語で話しかけて来るかと申しますと、どうやら日本人はすぐ解るらしいのです。生活の知恵なのでしょうか。

ホーチミン市内に、ストリートチルドレンを支援するタオダンという施設がありその一室で活動をしました。

治療を受けに来る子供達はあらかじめ招待状を発送しており、それを持って遠くからやってきます。時には何時間も歩いてくることもあったようです。

今では、政府の方針で一所に集められて保護されていると聞いています。

街角からストリートチルドレンが消えています。

現在では貧困地域の学校、障害者施設にこちらから出向いて活動しています。歯科治療と言っても、その日一日しか治療できないので、抜歯、小さい虫歯の詰め物、進行抑制のための薬物塗布に限られています。

日本での治療なら抜かずにすむ歯も、こちらではやむを得ず抜く事もあり心を痛める場面に、しばしば遭遇します。

何時かは全ての歯を救える日が来る事が会員の願いです。

この度、日本歯科ボランティア機構の活動が社会貢献支援財団様のお目に止まり、この様な名誉ある表彰をしていただき感無量です。

栄えある表彰式に出席して気が付いたことは、この世の中には素晴らしい活動をされている方が多いということです。特に人命救助には感動しました。

自分の命もかえりみず、誰かのために行動をとる、なかなか出来ないことだと思います。

素晴らしい活動しておられる方々と、肩をならべて表彰を受けられた事を光栄に思います。

また、ベトナム人のニエさんを日本に招待して下さったことに、この上もなく感謝の気持ちでいっぱいです。有難うございました。

帝国ホテルのおもてなしも感動がいっぱいでした。

頂いた表彰状は会員の心の励みとして、いつまでも生き続けることでしょう。

理事 山本 春江



▲このライトを持ったベトナム人のニエ君。ボランティアで参加してくれています。



▲順番を待っているところです。子供の治療が基本ですが、大人も希望されると治療を受けることができます。



▲障害を持った子供達が順番を待っています。



▲訪問して行くといつもこの横断幕で歓迎してくれます。



▲理事長が口腔内診査をしている所。治療の内容を決めている。

一般社団法人 ホワイトハンズ



代表理事
坂爪 真吾

新潟県

平成20年に新潟市で発足された法人で、自力で射精行為が出来ない身体障がい者のための射精介助サービスを提供している。他にも精神障害や知的障がい者を抱える家族や団体や自治体の担当者に向けて、性の問題に対応するガイドラインを作成し、研修や講演会も開催し好評を得ている。創設者の坂爪真吾さんは東京大学に在学中、社会学のジェンダーとセクシュアリティのゼミで性風俗に関する調査研究に携っており、「社会性のある性サービスを作ろう」と設立した。現在、全国年間約100人前後の利用者がいる。

(推薦者：公益財団法人 社会貢献支援財団)

この度は、社会貢献者表彰を授与して頂き、大変光栄に思っております。ホワイトハンズは、平成20年より6年間、脳性まひや神経難病、筋ジストロフィー等の男性重度身体障害者の方に対する射精介助を全国各地で提供して参りました。

これと合わせて、知的発達障害児者の家族のための性的支援のガイドライン発行や、障害者への性教育を目的としたバリアフリーのヌードデッサン会の開催、障害者のセクシュアリティに関わる専門職や研究者、当事者やアーティストを招いて議論を行う「生と性のバリアフリーフォーラム」の開催など、全国各地で「障害者の性」問題に対する理解を深めるための様々なイベント・研修・講演活動を行っております。

障害の有無に関わらず、人間にとって、性は生きていく上で必要な基本的な欲求であり、当たり前の生活行為です。しかし、障害者の性は、「そもそも存在しないもの」「あってはならないもの」として、福祉の現場においてタブー視され、黙殺されてきました。そういった陽の当たらない「福祉の闇」の領域に取り組む活動に対して、今回、社会貢献者表彰を授与して頂いたという事実は、私共の法人だけでなく、全国の障害者と支援者に大きな勇気と希望を与えるものとなると確信しております。

今年は、障害者権利条約が批准された年でもあります。この条約の中でも、「障害者が生殖及び家族計画について年齢に適した情報及び教育を享受する権利を認められること」「さらに、障害者がこれらの権利を行使することを可能とするために必要な手段を提供されること」という条文によって、障害者の性・生殖に対する社会的支援の必要性が言及されています。

障害者の性に対する理解と支援の必要性を明記した条約が批准された年に、社会貢献者表彰を授与して頂いたということを励みにして、今後も引き続き、全ての人が、障害の有無に関わらず、生涯を通して、性に関する最低限度の健康と権利を享受する

ことのできる社会を実現するために、鋭意努力していきたいと考えております。ありがとうございました。

代表理事 坂爪 真吾



▲バリアフリーのヌードデッサン会



▲学会での発表風景



▲射精介助を行うケアスタッフと利用者の脳性まひの男性



▲障害者の性に関する研修の開催風景



▲大学での講義風景



▲障害者の性に関する研修の開催風景

ウィメンズセンター大阪



大阪府

昭和59年から、女性の体と性に特化した様々な問題に取り組む団体として設立され、平成3年に現在の「ウィメンズセンター大阪」に名称変更し、電話相談「女・からだ110番」やセンター内に婦人科クリニックを開設した。平成22年に開設した「性暴力救援センター・大阪 SACHICO」の事務局として、性暴力被害を受けた女性の支援に携っている。SACHICOは24時間体制で医療的・心理的・法的側面からの支援を行うワンストップセンターとして、3年間で電話相談10,160件、初診来所者は557人を越えている。2013年には性暴力救援センター全国連絡会を結成し、その事務局としてもネットワーク作りにも力を注いでいる。

(推薦者：公益財団法人 社会貢献支援財団)

代表

高見 陽子

ウィメンズセンター大阪は、1984年に発足し26年間にわたり女性であるが故の身体や性と心の不安や悩みを聴き、社会のなかでの生きにくさを語り合う活動を続けてきました。職場で、家庭で、地域のなかで自分を見失い、疲れ果てていく女性たちの姿は、男女共同参画社会の実現が叫ばれる昨今でも変わりません。自分たちで解決できる力をつけていくカウンセリングや自己肯定感を奪われた体験を語り自分をとり戻す過程をプログラムされた講座を展開していくなかで語られるなかに、レイプや性虐待、DVについての体験も多くあります。性暴力が根深い社会問題であることを実感してきました。26年前に、「女のためのクリニックをつくろう！」と発足したウィメンズセンター大阪はまさに、女性が人生で起こった、あるいは体験したことで、それからの人生をあきらめることなく、むしろ、その出来事、体験がそれからの人生を主体的に生き抜くパワーになるように、そんな思いになれるような「女のためのクリニック」をめざしたのです。また、SACHICO代表でウィメンズセンター大阪のスタッフでもある加藤治子は、阪南中央病院の産婦人科医として長年にわたり医療現場から性暴力の問題や、妊娠期間中に起こるドメスティックバイオレンスを目の当たりにして、医療関係者への「女性に対する暴力防止」にむけた研修の必要性を感じていました。

性暴力被害者として来院されなくても外性器や下腹部への違和感として訴えられることもあります。更年期障害がキツイとこられて、お話を伺うと、「自分の気持ちを無視してセックスを強要される」「避妊に協力してくれず、これ以上の子育ては経済的に無理で妊娠が恐怖でした。」など、ドメスティックバイオレンスの被害者であったことがわかることもあります。ウィメンズセンター大阪のカウンセリングでも直接被害のことを話せない人も多く、ひきこもりやリストカットを繰り返し、カウンセリングのはしごをしたあげく、「はじめて話すのですが、20代のころレイプされて以来、それまでの自分とは変わってしまった。生きている価値はないと思いつづけてきました」と打ち明ける人。結婚しているが、子どもや、夫といるのが息苦しい人は「子どものころに性的虐待をうけ、身近な人、信頼する人からだったので、だれも信じてはいけないうようになり、人間関係が怖い」ドメスティックバイオレンスの家庭で育ち「母は父の表情やしぐさを気にするので精いっぱい私への性虐待にはきづいてくれなかった」「挑発的な服を着ているお前が悪いと言われ、私のせいで、と思っていた。どんな服ならいいのか選べない、どんな服が好きなのかわからない。」共通して言えるのは、すぐに打ち明けられる場所と人がいなくなった孤独感です。

被害を受けた女性は、自分が悪いという罪悪感をもたされてしまう人も多く、自分を責め続け、人を信じられず、身体は緊張状態が続きます。いつ、危険な状態にさらされるかもしれない危機を察知するためです。それが子どものころから続くとしたら、当然ゆったりとリラックスなんて出来ません。抑圧した感情を長期間抱えれば抱えるほど、後々の人生にまで影響を及ぼします。勇気をふるい相談した機関での二次被害がさらに傷をひろげ、ますます人が信じられなくなるのです。レイプされてやっと駆け込んだ、支援してくれるはずの機関で、「レイプされる方にも問題がある」「そんな場所に行くから」「被害者なら取り乱すはず。合意ではないか」など、打ち明けたことを後悔することを防ぐためにも、病院拠点型のワンストップクライシスセンター（性暴力救援センター・大阪 SACHICO）が

必要だったのです。支援員は24時間体制で待機し、ホットラインにかかる女性の声を聴き、今必要なサポートを当事者とともに考えます。SACHICOを設立することをきめてからは、具体的なネットワーク作りに1年以上をかけました。被害を受けた人はなかなか病院に足を運びにくく、警察に行くかどうか迷います。さらに法的支援がほしいと思えば一から自分で弁護士をさがさなければなりません。警察・病院・弁護士と二次被害にさらされることも少なくないのです。公的資金の援助もないなかで、医師やナース等病院関係者の負担は大きく、支援員もわずかな有償ボランティアです。交通費やその他の経費はカンパで運営されています。支援員の人員確保や研修の充実も含めて、継続するための課題は山積みなのです。初診者の年代は10代が最も多く、子ども家庭相談センターや児童相談所、非加害親、学校からは、性虐待の被害を日常的にうけている子どもの相談、診察依頼もあり、年少は1歳に満たない子からで、10歳までが多いようです。加害者のほとんどが顔見知りであり、保護者の立場の者であるため、深刻な人間不信と自己肯定感の喪失と、「心地よく感じてはいけない」「自分の身体は穢れている」「将来の夢がもてない」「身体感覚の喪失」「皮膚感覚の異常」「臭覚の異常」などが起こる場合があります。自分の身体の構造や働き、名称を学び、かけがえのない私を大切に思える感覚を育てると同時に、自分以外の人の身体や心、人生の領域をおびやかさない教育の充実がいそがれます。大切に思い合う性教育の重要性も検討の課題であると思われます。日本で初めての救済センターだとマスコミにとりあげられると、全国各地から、「私の住んでいる地域にありますか?」「以前性被害にあり、今も苦しんでいる、そのときこんなところがあれば」などの声がよせられます。被害者が被害を訴える、当たり前なことが出来ない国であること、支援体制の欠如が被害を増大させる一因だと思われます。救済センターの支援員の養成を担当するウィメンズセンター大阪はSACHICOと連携し、研修会を開き、毎回たくさんの児童相談所や子ども家庭センターや養護教諭、教師などの参加が多く、教育委員会の後援もいただいています。性暴力被害をなくすためには、加害者逮捕は警察庁、医療や福祉は厚生労働省、学校教育は文部科学省、男女共同参画関係の相談は内閣府と縦割りではなく行政・国の各省をこえての支援が必要なのです。長年女性のための支援を続けてサポートのノウハウをもつ民間のグループと連携し、必要などころに適切な方策と活動資金の援助などを考えていただきたい。そんななか、社会貢献支援財団から推薦のお話があり、活動を続けてきてよかった!と感激でした。帝国ホテル(一生に一度しかこれないだろうなあ)の食事のおいしかったこと、私たちの活動紹介をDVDをつくって流してくださいだったり、一生分の写真も撮っていただいたり、受賞者みなさんとも交流できた、すばらしい体験でした。授賞式のあとの歓談で安倍昭恵さんが大阪に行きますよ。と言ってくださったことはこの国も希望はあると心が熱くなりました。女性がイキイキと輝ける社会の実現のために、女性の健康支援に性暴力被害の問題は重要な課題です。女性のための救急医療として、病院拠点型レイプクライシスワンストップセンターを全国に!ご協力をお願いします。賞金50万は活動資金としてつかわせていただきました。ありがとうございます。

被害にあう人は特別、私には関係ない、関わりたくないと思っている人が減っていかないと世の中は変わりません。被害者の問題ではないのです、自分の問題であることを忘れないでください。

代表 高見 陽子



▲援助職研修



▲女のためのいろはかるた



▲アドボケーター講座風景



▲冊子 支援に関わる人のために3部作



▲女と健康フェスティバル分科会

特定非営利活動法人 おきなわ CAP センター



沖縄県

昭和53年にアメリカで作られた、子どもが暴力から身を守るための教育プログラム CAP (Child Assault Prevntion) を実施する NPO 法人で平成 8 年に沖縄で発足した。沖縄においても子どもへの暴力や虐待は少なくないが、(平成10年沖縄タイムスの調査で女子は80%、男子は25%が性暴力被害に遭っている) おきなわ CAP センターの活動は地道な努力が実を結び、行政と連携した「親子が健やかに育つ虐待予防啓発モデル事業」なども行い、これまでの講演回数は2,500回を超え、ワークショップには73,000人以上が参加した。全国にある CAP グループの中でも、ここ沖縄の団体の活動は確実な成果をあげている。17年に及ぶ活動。

(推薦者：公益財団法人 社会貢献支援財団)

代表理事
長田 清

「新たなステージへ」

おきなわ CAP センターの CAP とは、Child Assault Prevention の頭文字をとったもので、「子どもへの暴力防止」という意味です。CAP プログラムは、子どもがいじめ、誘拐、虐待、性暴力といったさまざまな暴力に対して、何ができるかを、ワークショップ形式で伝えていく活動です。対象は保育園児から小中高生までの子ども、保護者、教職員、地域の人たちです。おきなわ CAP センターは、1996年から活動を始め、2003年に NPO 法人となりました。県内各地でワークショップを実施し、年間約150回、これまでに約2500回の活動を行ってきています。それは30名のメンバー、そしてそれを支えるサポート会員約100人の力を得て維持されています。

いつの間にか18年の歳月が流れ、自分の子育てと平行して活動に取り組んできたメンバーも年をとり、その子どもたちも大きくなり、メンバーは新たなライフステージを迎えています。それでも私たちは本来の使命、沖縄の子どもたちの人権を擁護し、エンパワメントして、元気に育てることを変わらず続けています。この度、私たちの活動を評価していただき、その結果この様な立派な賞を戴けたことは、大変誇らしく、また長年の苦勞を認められ、ねぎらわれた思いがして、メンバー一同大変喜んでおります。

この活動を通じて社会と関わり続け、多くの志を同じくする仲間達と協働して、いろいろな企画に取り組んで参りました。私たちの活動には終わりはなさそうです。新しい時代を背負う子どもたちが次々生まれて来る限り、私たちの使命は続きます。この賞の受賞により、さらに気持ちが新たまり、より一層前進する意欲が高まりました。この受賞が私たちをさらなる高みに押し上げてくれ、新しいステージでの活動が予感されます。

他の受賞者の方々の活動も素晴らしく尊いものだと思います。それぞれが地域をよくするために活動されていて、そのことを知ることができたことも、私たちの心の支えとなりました。今後ともこれまで以上に精進し、受賞に恥じない活動を展開していきたいと考えています。本当にありがとうございました。

代表理事 長田 清



▲ワークショップでの講話



▲就学前のワークショップのようす



▲団体設立記念15周年講演会 メンバー写真



▲中学生に劇を見せているところ瀬戸の海で



▲法人化10周年記念事業

武田 純子



特定非営利活動法人
にじのかけ橋 理事長

兵庫県

重度の重複障害をもつ長男が福祉活動の原点となり、神戸市重度心身障害児（者）父母の会の活動のかたわら障害者への理解を得るための啓発活動に積極的に取り組みながら、平成14年に神戸市東灘区に「特定非営利活動法人にじのかけ橋」を設立し、重度の障害者の居場所となる生活介護施設や、居宅介護事業等の運営をしている。障害者と地域をつなぐ交流事業（スポーツ大会やグラウンドゴルフ大会の開催など）を積極的に開催したり、阪神淡路大震災の体験から要援護者の津波対策の在り方を地域モデルにして取り組む提案を自治体に呼び掛ける活動なども行っている。

（推薦者：金附 洋一郎）

この度、光栄にも社会貢献表彰を拝受して身に余る光栄を感じております。

この受賞は、これまで一緒に活動してきた皆さんの代表としていただいたものと心より、お礼申し上げます。「神戸市重度心身障害児（者）父母の会」「地域の民生委員児童委員協議会」そして「特定非営利活動法人にじのかけ橋」加えて「地域のふれあいのまちづくり協議会」等それぞれ活動できる場所があったからこそ、今日に結びついたものとあらためてその方々に感謝とお礼を申し上げます。重度の長男を通して41年間、ひと味違った人生を歩んで参りましたが、一人でも多くの人に障害の理解を分かっていたきたい…、交流事業を通して一人でも沢山の方々にかかわっていただきたい…そのような想いが少しづつでも実を結んで参りましたのも大きな喜びでもありました。

この賞に恥じないように初心に戻り、又一步一步踏みしめて次世代の担い手を探しながら一層の精進をいたします。

ご推薦いただきました金附洋一郎様、故・森定弘次様には心より感謝を申し上げるとともに障害福祉の道に導いてくれた長男・嘉浩、そして誰よりも報告したかった亡夫・義夫にお礼を申します。

この度一緒に交流させていただきました受賞者の皆さまとも素晴らしい出会いの機会をいただき尊い活動をされておられる方々のお顔は輝いておられました。

お世話になりました関係者の皆さまには心より感謝とお礼を申し上げます。



▲にじのかけ橋の仲間達と事業所前で



▲にじのかけ橋の利用者と一緒に調理



▲にじのかけ橋設立10周年記念式典（平成25年1月）



▲地域交流 元気アップ運動会



▲東灘福祉五団体リバーサイドクラウンゴルフ大会



▲息子を囲んで 息子（41歳）の誕生日を孫たちと一緒に



▲東灘区民生委員の研修会にて